

編集室

＊ 今回の編集室は、特別小特集編集チームの富士通研の大田恭士さん、阪市大の辻岡哲夫先生、日本 IBM の井上忠宣さん、産総研の濱崎雅弘さんにまとめて頂きました。

(編集理事 森川博之)

＊ 今回、「私の七転び八起き」の担当を通して、音響素子やテレビ会議など我々の生活に密接に関連する技術の国際標準化における生々しい苦労話を聞かせて頂いた。これらの貴重な経験談から何を感じ、何を教訓として生かせるのか。読者諸兄の幅広いバックグラウンドや経験値で様々な響き方が期待でき、非常に興味深いと感じている。

私の場合は非常にシンプルだが、まず必要性を肌で感じることで、自らが使い手として明確にイメージできることが標準化を推進するモチベーションの原点であることを再認識させられた。また、インターネットの爆発的な普及などで、ボーダーレス、フラット化の波が押し寄せる中、日本人というアイデンティティが国際舞台で十分通用するポテンシャルを持つことも強く感じた。

技術にとことんこだわる、協調して全体最適解を追及する、これらは日本が世界に誇れる特性ではないだろうか。このことを改めて気付かせて頂く貴重な機会でもあった。

(WG・A 大田恭士)

＊ 私は偉業を成し得た方々や人生の先輩(一般の年配者)の言葉を前向きに広く受け止めるように心掛けている。ちょっとした言葉にも深い重みがあるような気がしてならないからである。

今回、特別小特集号の編集に参加させて頂く機会を得て、大きなパワーを得た。多くの壁を乗り越えるためにはリスクを恐れず揺るぎない信念と情熱が必要であること、他人とは違った考えを持ち、現在はやっているものよりも将来に必要とされるものを見極め、それを考えることの大切さなど、実体験に基づいた重みのある言葉を頂いた。

多くの場合、若いころに出会った先生や人物の影響が大きいという。私は大学で学生に接しているが、果たしてこれらのことを伝えられてきただろうかと考えさせられた。

学生は多くの可能性を持っている。いろいろな潜在能力を引き出し、国際的活動に対する壁を取り除き、揺るぎない信念と優れた先見性を持ってグローバルに活躍してもらえるよう一層努力したいと感じた。

(WG・B 辻岡哲夫)

＊ 近ごろはインターネットの検索エンジンを使うと手軽に調べものができます。電子情報通信技術の進歩に伴って、より簡単に、より大量の情報を入手することが可能になってきました。情報の吟味・分析・活用が今後更に重要性を増していくでしょう。今回の特別小特集「私の七転び八起き」の編集を担当させて頂いて、最も感じ入ったのは、つい情緒的に受け止めがちな自分の失敗体験を、冷静かつ客観的に分析した上で教訓へと昇華し、更に次の機会に成功へとつなげているところです。

2007 年は政界、相撲界、ボクシング界、芸能界など至るところで、マスコミやネット上の不特定多数による、ある個人への激しいバッシングが頻繁に起きたように思います。それぞれ「けしからん」事柄だったのかもしれませんが、ヒステリックなまでのバッシングには恐怖すら感じました。2008 年には、バッシングを乗り越え「八起き」してきた前向きなニュースを期待したいですね。(WG・C 井上忠宣)

＊ 今回、初めて特別小特集の編集のお手伝いをしました。新年号ということでお題は「七転び八起き」。我が身を振り返ってみると、順風満帆とはいかないが周りの助けもあって大きくこけることもなく何とか来ている気が。ふむ、これはこれで良いのかなと思いつつ諸先生方の話を伺うと、転んで立ち上がれなくなりそうな危機や転機を乗り越えて高みにたどり着いていらっしゃる。大きな危機や転機に遭遇するのも才能の一つかと思いつつ、まだ若輩者の自分が小さな危機も避けて歩いてばかりであることに気付かされました。趣味でやっている空手には重心を崩してわざと転ぶ(実際にこけてしまっただけですが)ことで素早く踏み込む技がありますが、自ら飛び込んで転んでその後大きく飛び上がる、そんなことをやっていかねば大きく前には進めないと感じた次第です。

新年明けましておめでとうございます。皆様にとって今年が幾つかの危機や転機をくぐり抜けた後に大きな飛躍が得られる年になることをお祈りします。(WG・D 濱崎雅弘)